

東京国立博物館の展望と構想

— 創立151年の新たなスタート

東京国立博物館長

藤原 誠

ふじわら まこと



当館は、1872(明治5)年に東京の湯島聖堂で開催された博覧会をきっかけに「文部省博物館」として発足した。2022年に創立150年を迎え、コロナ禍ではあったが様々な行事を行った。中でも最も注目を集めたのは特別展「国宝 東京国立博物館のすべて」(2022年10月18日〜12月18日)である。入場制限をしつつも30万人を超える来館者を

集め、事前予約の枠が早々に埋まってしまったため、会期を1週間延長した。当館が所蔵する国宝89件を会期中に全て展示することがテレビの美術番組だけでなく視聴率の高い一般の番組でも放映されたため、幅広い層に関心を持っていた。

社寺や個人から寄託を受けた作品を加える

と、当館には国宝143件、重要文化財910件(うち648件は当館が所蔵)が収蔵されている。有名な見返り美人図や浮世絵など未指定の名品も数多いので平常展に見どころは多い。ただし、日本の美術作品は劣化しやすい素材で作られているため、頻繁な展示替えで保存と公開のバランスを取らなければならぬ。そこで、作品の展示は季節感も大事にしながら年間を通して計画的に行っている。

事業資金獲得に向けた取り組み

新型コロナウイルス感染症の流行以前、2019年の入場者数は過去最高の259万人を超える盛況だった。これは海外からの観光客が増加したためである。現在は感染の収束

により来館者数が戻ってきているが、国からの運営費交付金が年々減少する中で事業資金を得るためには、自己収入をさらに拡大する必要がある。

海外からの観光客の誘致に向け、羽田空港国際線ターミナルからバス停、ホテルに向かう道筋に当館が三越伊勢丹とコラボレーションした商品を取売する店舗を置いたり、モノレールには電飾看板を設置、京浜急行線ではホームの壁や柱を当館のポスターで覆いつくすなどして、認知度を上げるべく努めている。また、成田空港と成田空港駅の構内には当館の作品画像を使った装飾を各所に設置し、都内の主要ホテルにも当館の多言語ガイドマップを配備している。そうした努力の成果が表

れて、平常展には海外の観光客が非常に多い。

さらに、休館日や閉館後には、ドラマ等の撮影や新商品の発売前の発表会、パーティーも積極的に受け入れて有効利用している。有名なドラマの印象的なシーンに使用されたこともあり、新婚カップルが記念写真を撮影する場所としても人気が高い。こうした事業の収入は増大しており、当館の運営資金の有力な財源となっている。

ファンドレイジングの努力も行っており、国宝の「檜図屏風」^{ひのすずびょうぶ}、埴輪「挂甲の武人」^{けいこうのぶじん}の修理は、一企業の支援で実現した。クラウドファンディングでの作品修理も行っている。私も企業等に働き掛け、より幅広い事業への

協力をお願いしている。

快適な空間の創出

当館が上野に移転したのは1882年。当初の本館は関東大震災で損壊し、現在の本館は1938年に開館した。構内にある5つの展示館のうち、最も新しい平成館、法隆寺宝物館は1999年の開館である。本館の空調機器、展示ケースの更新はもちろんだが、平成館特別展示室の改修、それから各展示館の照明のLED化も喫緊の課題である。

現在当館に最も求められるのは、快適な休憩スペースと次代を担う子どもたち専用のエリアである。広い展示室に膨大な作品があり、

当館作品画像による成田空港壁面装飾

室内の椅子は少ないうえにゆっくり休むことができない。庭のベンチでは、雨天時と夏冬には休めない。博物館は作品とゆっくり向き合うことで日常の疲れを癒やす場所でありたい。大英博物館のグレートコートのような日が差す清潔な空間で

することができれば滞在が楽しくなるはずである。

また、従来、来館者の年齢層は比較的高めで親子連れは少なかったが、キッズデーと銘打った日には未就学児を含む子どもたちでにぎわう。精巧な甲冑やきものの複製の着用体験、スタンプによる多色刷りの体験などが人気である。本物を展示室で見ながら体験することは当館ならではの事業である。ただ、子どもたちに心置きなく楽しんでもらうには、専用スペースの設置が望ましい。

昔は年間200万人の来館者を迎えることは想定していなかっただろうし、快適な空間を提供するという考え方も希薄だっただろう。2023年は創立151年。これから始まる50年では、伝統を保持しながらも時代の要求にあわせて設

備を更新し、来館者の穏やかな笑顔がふれる博物館を目指していく。この節目を新たなスタートとしたい。



精密な複製よろいの着用体験



「国宝 東京国立博物館のすべて」会場入り口バナー

